

◎書評『老後破産』

NHKスペシャル取材班

『老後破産 長寿という悪夢』

新潮社 2015年7月10日

1300円（税別）



将来の「高齢社会」に対して、当事者である高齢者からの改革策ではなく、現役世代からの将来への不安を契機にした訴えが、不安を増幅しながら話題になっている。いま、ひとり暮らしの高齢者に何かが起きており、そして現場からしか議論は始まらないとして、NHKスペシャル取材班は現場にはいった。

キーワードは「経済的困窮」で、タイトルにしている「老後破産」とはどういう境遇の高齢者をいうのかということー

ひとり暮らしになった高齢者で、年収が生活保護水準（約13万円）を下回っていても生活保護を受けていない（受けられない）人で、預貯金の蓄えがないか乏しく、年金（国民年金6万5000円+）だけでギリギリの生活をつづけている人。そして病気になったり介護が必要になったりすると、とたんに生活が破綻してしまう——こういう境遇におかれた高齢者を、番組（NHKスペシャル）のプロデューサーが「老後破産」と呼ぶことにしたという。ざっと200万人余がおり、増えつづけているという。

だから「長寿という悪夢」のサブタイトル（キャッチコピー）には、生きつづけることで追い詰められていく（「預金ゼロ」へのカウントダウンもある）現実の苦しさ、厳しさ、虚しさが込められている。

取材班はそういう関心で、さまざまな問題をかかえて「老後破産」寸前にいる高齢者を対象に選んでいる。

——必死で働いてきたのに報われない老後——取材中にキャッチしただれもが口にするこのつぶやきは、200万人にとどまるものではないだろう。

都営団地に住む80代の菊池幸子（仮名）さんは、その典型のような暮らしをしている。

菊池さんは、8年前に独身だった40代のひとり息子を失い、3年前には夫をガンで失って、ひとりになった。夫の生前はふたりで13万円ほどの年金で暮らしていたが、その後は毎月8万円（国民年金6万5000円＋）に。専業主婦だったから厚生年金はない。経費は家賃（1万）、介護サービス（3万、要介護2）、生活費（公共料金を含む、7万）で、毎月出る3万円の赤字を預金（残り40万円に）を取り崩して充てており、「老後破産」へのカウントダウンが始まっている。

週に1回の訪問看護と毎日1時間の生活介護サービスを受けている。リウマチがあって外に出られないし、室内の移動もままならない。自宅はなくとも預金がある間は生活保護が受けられない。というより、菊池さんもそうだが、「多くの高齢者はその権利（生活保護）を行使しようとしない」と取材者は感じ取っている。

——「贅沢は敵」とばかりに、出費を切り詰め、耐え忍んでいる。生活保護を受けることは、「国の御世話になること」でもあり、罪悪感を伴うと訴える声も多い——と報告する。

経費の節約は、食費を切り詰める以外にない。田代さん（83歳）は電気をとめられ、年金支給日まで冷麦の乾麺で食いつないでも暮らしを変えない。宮田さん（70代、仮名）はあんパンが食べたいといい、川西さん（83歳、仮名）は1食分100円ほどでやりくりしている。

こういう暮らしをする高齢者を「老後破産」といい「長寿という悪夢」と呼ぶ現役世代には理解できない「人生の確固とした誇り」があるからである。

部屋でひとり、手のリハビリを兼ねて塗り絵を塗る菊池さん。童謡の「茶摘み」を歌いながら色鉛筆を動かす菊池さんの胸の中を流れている温かな感性は「悪夢」とはほど遠いものだ。これまでに出会ったやさしい人びとが激励してくれているからにちがいない。

取材対象に80代が多いが、大正から昭和初年生まれの高齢者は、戦中・戦後のきびしい暮らしを自立してしのぎ、その後もみんなが等しく豊かになるために努めてきた（それが九割中流社会をつくった）。菊池さんの夫も工務店の主人として、働く人たちみんなが豊かになることに配慮し、自らの老後のための預金を積むことなど考えていなかっただろう。

そういう「みんな等しく豊かに」を貫いてきた人びとを、最後まで保てるような高齢社会対策を講じないで、すぐ「生活保護」という底の浅い「社会保障」で放置してきたのはだれか。1日でも長く生きることの命の尊さを知る人びとの願いを閉ざして、「もう生きたくない」と吐露する高齢者たち。本書は2014年9月に放送したNHKスペシャルが『老人漂流社会～『老後破産』の現実～』をベースに描き直したルポだというのが、こういう高齢者の声をいくら拾っても解決策は見えてこない。

率直に言えば、こういう本は、現役世代によって出されてはいけない本であり、売れてはいけない本である。しかし、こういう社会にしないために活動をしつづけている人びとの声は、売れる本にはならない。「高齢社会」に警鐘を鳴らすような本は売れないということになっている。曾野綾子、五木寛之、瀬戸内寂聴さんなど作家の高齢者本は別にして。

取材班の指摘を繰り返すが、
——一生懸命に働き、一生懸命に生きてきた普通の人たちが報われない、それが今の日本の老後の現実なのだ——というところに行き着かざるをえない。

こういう社会を呼び寄せてしまった責任はだれにあるのか。この20年の政治リーダー・官僚であり、企業家、学者・研究者であり、マスコミ、そして活動家であろう。

絞れば、しくみの全容を見渡せる立場にあり、その解決策を講じることができる政治リーダー・官僚である。1995年に「高齢社会対策基本法」(村山内閣)を制定し、1996年に「高齢社会対策大綱」(橋本内閣)を閣議決定して以来、20年に及ぶ「高齢社会対策」の延滞、強くいえば政治の欠如がある。平和時にあっても、歴史とは実に取り返しのつかない苛烈なものである。その間のすべての政治リーダーと関係官僚には重い責任がある。(8・31 堀内 記)

◎書評朝日新書『下流老人』

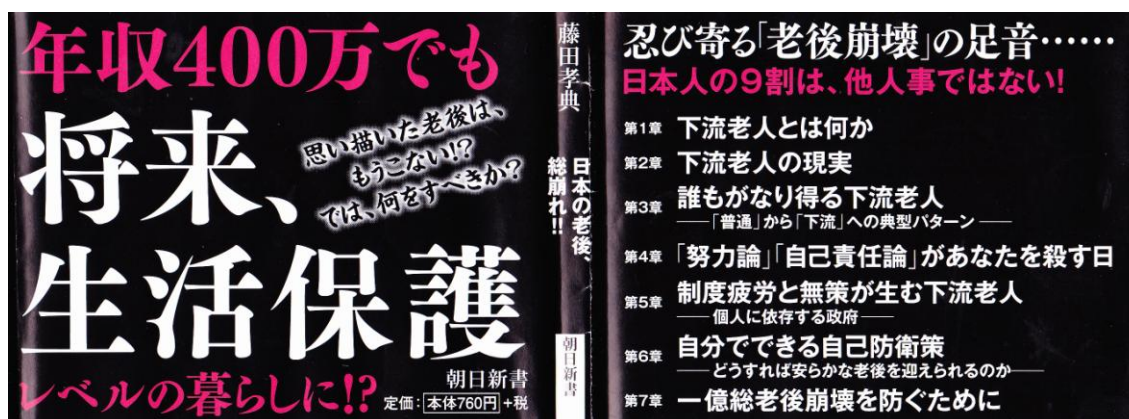
藤田孝典

『下流老人 一億総老後崩壊の衝撃』

朝日新聞出版 2015年6月30日
760円(税別)

「下流老人」というタイトルは、筆者の造語だという。

筆者は、さいたま市で12年間、生活困窮者の支援をしてきた30代のNPOの運営者(ソーシャルワーカー)であり、年間300人ほどの生活困窮者の相談を受けている。そのなかで多くの高齢者の困窮した惨状をみてきた。下流老人というのは、「生活保護基準相



当で暮らす高齢者およびその恐れがある高齢者」と定義しているが、実感の裏打ちがあるのだろう。いいかえれば、国が定める「健康で文化的な最低限度の生活を送ることが困難な高齢者」である。

そして三つの「ない」が指標とされる。①収入が著しく少ない。②十分な貯蓄がない。③頼れる人間がいない。つまりあらゆるセーフティネットを失った状態をいう。

本書に先駆けて、NHKスペシャルで「老後破産」が放送され、高齢者の実態の一部が明らかにされ話題になった。放送では全体像を把握できていないとして、それを網羅したわかりやすい文献を出そうというのが、本書出版の趣意である。

上記の『老後破産』と同様の趣意で同じころに発刊されたが、喜ぶべきことではなく両書ともベストセラーになっている。本書が違うところは、親世代だけの問題ではなく、子ども世代が共倒れすることや、少子化を加速させる（子どもがひとりいなければ、十数年は下流にならずにすむ）といった次の世代への影響を指摘しているところにある。

筆者は相談にきた高齢者が異口同音に、
「自分がこんな状態になるなんて思いもしなかった」
とつぶやくのを聞く。

老後の貧困は想定外の事態で、立ち至った事由は、もともと貯蓄がなかったり、思いのほか年金が少なかったり、親の介護で職を辞めたり、同居の子どもが病気（うつ病）だったり、自分が大病をしたり、といろいろ。事由は個人的にみえるが、社会の問題であり、全世代にかかわると問題提起している。

「下流老人」は姿を見せないようにして隠れているともいう。そしてとくに一定の年代より上の人には「オカミの世話になりたくない」という意識が根強くあると指摘する。そのような考えに到ってしまった過程に目を向け、生活保護を受けやすくすることが必要という結論になる。

「一定の年代より上の人」が「オカミの世話になりたくない」という意識をもつことに気づいている。たしかに大正期から戦前生まれの人は「オカミの世話」を信用していない。戦争を起し、自由を奪い、戦禍の苦しみをもたらした。戦後もとくに「オカミの世話」を受けずにみんなして働いて豊かになった。その果実を、不安な将来の老後のために貯蓄することで守ろうとする「一定の年代より下の人」、格差を認めることで専有しようとする人びとを生んだ。

筆者は、現実の声を聞きながら、さまざまなケースを統計を駆使して一般化し社会化することに苦心している。「一億総中流」社会がこのまま放置したままだと、いずれ「一億総下流」の時代がやってくると、危機感をもって受け止めるよう訴えている。

いずれにしても率直に言えば、こういう本は現役世代によって出されてはいけない本であり、売れてはいけない本である。